



「ふくしまキッズ」の話が舞い込んできたときに、内心一番ワクワクしたのは、顧問の私だったと思います。たくさん子どもたちと北海道の野山を走り回るのを想像したからです。子どもが好きです。(家内の言い方だと)同じレベルだからということになりましょうか。仙台から一緒の新幹線に乗り込んだときから、気持ちは高揚気味でした。そして、トランクと一緒に持って行ったサクラの木でできた曾祖父形見の大事な木刀を電車において来ました。宿舎で毎朝素振りに使おうと思っていたものですが、後で気づいたときには、もう見つかりませんでした。代わりに山で手頃な木を拾い作って振っていました。子どもたちと山で秘密基地づくりをしたときに、その木刀の話が口から出たら、「サクラの木刀見つかるといいねえ。」と、言われました。

初日に出会った小1の女の子から名前を聞かれ、「たかはし」と言うと、「じゃ、たっちゃんと呼ぶね。」と言われ、この期間たっちゃんという、生涯で一番若い呼び名で過ごしました。4日目の晩には、(JR北海道の所有地のため)宿舎になっている客車のコンテナに40人の子どもたちを詰め込んで怪談をしました。恐がってくれました。

ボラ部の生徒たちの綴った『宝石のような体験記』は、まさに本人たちの宝物になりました。そして、私にも。それにしても、1週間の泊まり込みというのは皆にとってはじめて。2日目でいったんへ口へ口になったのを見てとった同行のお世話係のメール(修道女)Eの提案で、お泊まり係を二人ひと組交代制等にすることで、生徒たちは最終日までリタイアすることなくできたのだと思います。(顧問は帰日の前日に、カヌーを岸に引っ張ってギックリ腰をしました……ああ、ナサケナイ)

お別れの時に、私はすっかり忘れていたのを、「たっちゃん、サクラの木刀見つかるといいね。」と言われて、ドキリ。グッときました。この思いやりと優しさを持つふくしまキッズに、大きな、大きな幸多かれ。

(ボランティア部顧問 高橋覚)

〔補足〕「覚の写真(遺影-入力者注記)の前に木刀がありますが、福島キッズの時に無くした木刀が、私の祖父からもらった大切な木刀でした。私のひいじいさんが、海軍の軍人で、その人から木刀が祖父に、何故か父ではなく覚に手渡されました。無くして覚はしばらくがっかりしていました。(略)祖父は陸軍の時に剣道もやっていた縁から覚が剣道をしている事を殊の外喜んでいました。無駄口をたたかない”日本男子”と思っていた節がありました。(夫人の手紙より)